

日本アメリカンフットボールの殿堂に 新たに11名が殿堂入り

日本アメリカンフットボールの殿堂には、これまでに25名の方が殿堂入りされていますが、2018年1月に新たに11名が殿堂入りされます。殿堂顕彰者の表彰は、ライスボウルのハーフタイムで行います。第4回顕彰者として殿堂入りされる方々をご紹介します。(誕生年順)



藤本 武(ふじもと たけし) 1922～2005年
9歳より10年間、米国で育つ。日米関係悪化により19歳で帰国。慶應予科で柔道部に入部したが召集。復員後、慶應義塾大学に復学し、フットボール部に入部。米国育ちのフットボールの知識と体格で入学後、直ちにレギュラー選手となり、1947年第1回甲子園ボウルにフルバックとして出場。強烈な中央突破を武器に先制のタッチダウンパスを投げるなど活躍。勝利の立役者となる。1948年、1949年と主将を務め、1949年の第3回甲子園ボウルでは、第2Q、スパイクにより鼻骨損傷の負傷をしながら手当後、プレーを続行。第1回甲子園ボウルに続く2度目の勝利に貢献。卒業後は審判員となり、甲子園ボウル、ライスボウルも担当。審判組織の充実、後継者育成に寄与。



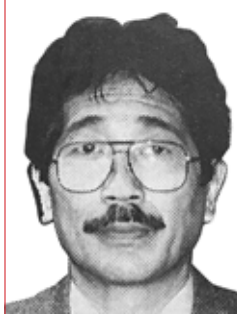
Chuck Mills(チャック ミルズ) 1928年～現在
イリノイ州立大学でガードとして活躍。NFLのコーチに就任後、1967年ユタ州立大学(NCAAディビジョンI)のヘッドコーチに就任。1971年同チームを率いて単独チーム初の来日、関東、関西で全日本と2試合を行う。さらに1974年NCAAディビジョンIのウェイクフォレスト大学を率いて2度目の来日、関東、関西で全日本と2試合を行う。同氏は、来日中、日本チームと合同練習を行い、戦略、戦術面でのアドバイスを行うなど、我が国フットボールチームの技術力向上に寄与した。またその後、訪米した日本の関係者に様々な支援を行い、我が国のフットボールの発展に寄与した。1974年、同氏の提案と寄付により、日本の学生の年間最優秀選手賞(ミルズ杯)を設けた。



野村 正憲(のむら まさのり) 1930年～現在
都立九段中学(現九段高校)でタッチフットボールに出会う。立教大学に入学、ドナルド・T・オークス監督の下にノートルダム大のシステムに基づきアメリカ陸軍士官学校コーチ団の指導も受け、日本人の体に合ったTフォーメーションを作り上げ、1951年、甲子園ボウルに出場。QBとして巧みなボールハンドリングで初優勝。1952年、甲子園ボウルに連続出場。精巧な試合展開の司令塔として2連覇に貢献。その後も立教大学が甲子園ボウル4年連続出場となるTフォーメーションを完成させた。立教大学が確立したTフォーメーションはその後、各大学に採用され、Tフォーメーションの初代QBとして我が国の近代フットボール化に貢献。



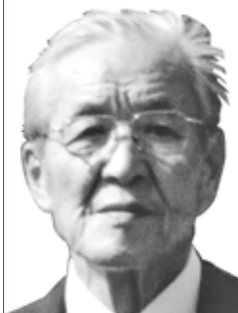
鈴木 智之(すずき ともゆき) 1934～2016年
中学からフットボールを開始。関西学院大学では、2年生からレギュラーのQBとして活躍。米国のフットボールの書籍などからフォーメーションを研究、確実なフォワードパスとともに走れるQBとして活躍。3年で出場した1955年第10回甲子園ボウルでは、劣勢で迎えた第4Q残り10数秒で同点のタッチダウンパスを成功させ、引分け両校優勝への原動力となった。この試合を含め、レギュラーとして出場した甲子園ボウルで3連覇する。攻守に出場し守備でもラインバッカーとして活躍。卒業後も経済人としてフットボール活動を支援。特に社会人フットボールの支援と大学チームとの連携に寄与。



吉岡 龍一(よしおか りゅういち) 1937～2008年
聖学院高校時代、タッチフットボールで活躍。1950年代半ば、ラン攻撃第1期黄金時代を築いた日本大学のフルバックとしてバックス陣の中核となる。攻守出場時の守備はラインバッカーとして活躍。試合を通してすべてのプレーに参加し、疲れを知らない、力強いバックスであった。1956年から4年間在学中、毎年関東大学リーグを制し、甲子園ボウルに連続出場。2年となった1957年からはレギュラーとしてフル出場。それからの3年間の甲子園ボウルでは、パスのレシーブ、ランで毎年、タッチダウンを挙げ、日本大学3連覇に貢献した。卒業後もOBチームの副主将を務め、在日米軍とのボウルゲームで果敢なランニングを展開した。



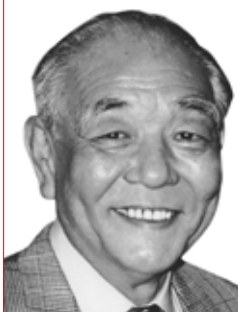
横溝 裕利(よこみぞ ひろし) 1942～2008年
1961年、日本大学入学とともにフットボール部に入部。走り、投げのQBとして同大学第二期黄金時代を築く。4年間、関東大学リーグを制し、レギュラーとして出場した1963年第18回甲子園ボウルでは、第4Qに約50ヤードのロングパスで逆転勝利。翌1964年は、アンバランスト、クイックパント体からラン、パスを織り交ぜた多彩な攻撃、的確な判断で日本大学4連覇を果たした。同年12月、戦後初の全日本チームの米国遠征にQBとして選抜され、2試合(1分1敗)を戦った。卒業後もOBチームに参加、多くの試合で活躍する。



井床 由夫(いこよ よしお) 1927～2008年
関西学院大学が甲子園ボウル初出場の1949年第4回大会にエンドとして出場。180cmの身長、体重80kgの大型ラインとして活躍。ブロック、パスキャッチ、ランニングに加え、パス力とフットボールのすべての動きに長けたプレーヤー。同大会では、第1Q3分、ダブルリバースからのボールを受け、先制のタッチダウンをあげる。また翌1950年副将となり、第5回甲子園ボウルでは守備ではライン中央を守り相手の攻撃を抑えるとともに、4Qではダブルリバースを受けてから、勝利を決定づけるタッチダウンパスを成功させ、関西学院大学2連覇に貢献。



高橋 治男(たかはし はるお) 1930年～現在
戦後始まった我が国における旧制中学(奈良中学)タッチフットボールの1期生。関西学院高等部から1949年、関西学院大学に進み、180cm、80kgの俊足、大型のフルバックとして、その突進力を生かし4年間レギュラーとして活躍し、4回の甲子園ボウルにも出場。ランのみならず、パス、キックともに兼ね備えた活躍で、関西学院大学シングルウィングフォーメーションではラン、ブロックを生かし原動力となり攻守に出場。チームの勝利に貢献する。卒業後は、関西学院高等部の教員、関西学院大学教授として関西学院フットボールの推進に寄与。



徳永 義雄(とくなが よしお) 1930～2001年
戦後始まった我が国における旧制中学(豊中中学)タッチフットボールの1期生。関西学院高等部から関西学院大学に進み、パス、ラン、パントとも、卓越した能力で活躍。リーグ初優勝に貢献。続く1949年第4回甲子園ボウルでは1年生ながらハーフバックとして攻守に出場。攻撃ではダブルリバースのプレーで先制点を挙げ、守備では自陣5ヤードでパスをインターセプト、95ヤードのリターンタッチダウンをあげた。1966年、1967年の2年間、関西学院大学の監督を務め、両年リーグ優勝に導くとともに1967年では甲子園ボウル優勝を果たす。また関西アメリカンフットボール協会理事としてフットボールの発展に寄与。



木谷 直行(きたに なおゆき) 1935年～現在
関西学院中学タッチフットボール部創部メンバーの一員で、その後、関西学院高等部、関西学院大学で10年間、ガードとして活躍。高校王座2連覇、そして大学4年間は、全試合無敗の成績のラインとしての功労者。特に1956年、4年主将として出場した第11回甲子園ボウルでは、自身の鉄壁な守備とチームの統率で相手の攻撃を完封、同大学甲子園ボウル4連覇を達成。同シーズンの第10回ライスボウルでも主将として全関西をまとめ7年ぶりの勝利の原動力となる。また西宮ボウルに10年連続出場、関西学院大学のコーチに就任し指導者としても活躍。後楽園球場の人工芝化の記念で開催された1976年のグリーンボウルでは、監督として西日本選抜チームを率いた。



木村 洋(きむら ひろし) 1940年～現在
高校時代、野球部で活躍。1959年、日本大学に入学、素早い動きと強力なブロックの攻守フル出場のガードとして活躍。1961年、4年生部員が不在のため3年生として主将に就任、2年間連続の主将となる。3年時には、経験のある3年、2年の部員が少ない中、毎週のOBとの練習試合で実力をつけ、関東大学リーグ制覇。同年の甲子園ボウル、および翌1962年の甲子園ボウルと連続制覇。日本大学第二期黄金時代の始まりの中核選手として貢献。卒業後、審判活動に参加しボウルゲーム等、多くの試合を担当。その後、警視庁のコーチ、日産自動車の監督として指導。また社会人フットボール協会の役員として普及に貢献。